

次世代 HERO

Next Generation's Hero



日本プロボクシング協会主催

第4回ジュニア・チャンピオンズリーグ全国大会

◆50kg級優勝

こじょう ゆうま
古城 佑馬 さん

◆64.5kg級準優勝

ささき ひゅうが
佐々木 彪雅 さん

切磋琢磨し合う2人の目標

「インターハイで優勝し、プロになり、勇気と感動を与える世界チャンピオンに！」

9 月4日東京後楽園ホールで行われた第4回ジュニア・チャンピオンズリーグ全国大会決勝戦に出場した古城さんは、小学6年生の時に同大会に出場。当時は惜しくも判定負けで準優勝でしたが、今回は50kg級の優勝を勝ち取りました。

同じ関門JAPANボクシングジムに通う佐々木さんは、初出場ながらも同大会64.5kg級で準優勝。

2人とも垢田中学校の3年生で、古

城さんは、格闘技好きのお父さんに勧められて、佐々木さんは格闘技好きの叔母さんが見ていたテレビの影響で、ジムに通い始めました。

夏休みには毎日4～6時間のハードな練習をこなした2人。

ボクシングは楽しくて、精神面でも強くなったそうです。

ジムで指導をする高橋会長は「感謝を忘れず、素直で愛のある人間になってほしい」と、期待を込めます。



▲「楽しむことでベストパフォーマンスが出せる」がジムのモットー



夏の甲子園 よみがえる あの感動



市長コラム 希望の風

市長の部屋

高校野球に関する規定は厳しく、そのような見せ場を作ることはできませんでした。

しかし、彼らは本当に素晴らしい戦いを連日繰り広げ、私たちに言葉では言い表せない感動を届けてくれました。全国が注目する舞台で、気後れせず、常に前を向いて勝利に向かって突き進む姿は下関市の歴史に残る感動のシーンの連続だったと言えます。下関国際高校のさらなる活躍を願っています。

「実際の、私の周りにも」パレードをしないのか?」報告会ぐらいいやったらどうだ?」との意見がたくさん寄せられたのですが、

大阪桐蔭に勝利しただけでも十分な評価に値することは分かっていたのですが、春のセンバツ準優勝校の近江高校に勝つことができたなら、市としてどのような対応をしたらよいか。どのように市民の皆さんとその喜びを共有することができるか、甲子園に向かいながら、いろいろな思いを巡らせていました。

皆さんこんにちは！ 前田晋太郎です。先月の市報の特集で取り上げましたが、今年の夏といえば、何ととっても、下関国際高校の快進撃ですよね。この原稿を書いていると、8月18日に下関国際高校が大坂桐蔭に勝利した瞬間の、あの感動がよみがえってきます。勝利した瞬間、「強い。この勢いなら全国優勝も十分あり得る。何とか近くで見届けたい」と思ったことをはつきりと覚えていています。